

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：摂理シリーズ

摂理への信仰は希望の源

「われは天地の創造主、全能の父なる神を信ず。」神の途方もない豊かさをこの使徒信經の第一条に完全に納めることはできません。実際、世界一目に見えるもの見えないものすべて一の創造主としての神を信じることは、聖なる摂理の啓示と有機的につながっています。

創造のみわざについて考えを深めつつカテケージスを始めましょう。テーマはキリスト教の信仰と信仰に招かれている人の核心に触れるもの、神の摂理についてです。賢明かつ全能の父として、この世にそして全ての被造物の歴史の中に現存しておられる神についてなのです。神の現存によって被造物、とりわけ神の似姿として造られた人間は真理と愛に導かれ、永遠の生命という目的地に向かう旅である自己の人生を生きることが出来るのです。

伝統的なカトリック要理は「なぜ神は人間を造られたのか」と問いかけます。教会の大いなる信仰に鼓舞された私たちは次のように繰り返します。「この世で神を知り、神を愛し、後の世では永遠に主と共に幸福に過ごすことが出来るよう、神は私たちが造られた」と。

しかし、冷静・着実に人類の歴史を導く神についてのこの素晴らしい真理にも拘わらず、人間の心には二つの相容れない感情があります。一方では、摂理の神を受け入れ自らを神に委ねるよう導かれます。詩篇が歌うように、「私は魂をしずめ、和らげた、母から乳離れした子のように」と。(詩篇30・2) 他方では、物事に惑わされて創造主を忘れるのか苦しみによって父なる神を疑うのか、生命の主であり救い主である神に自らを委ねることを恐れたためっています。神の摂理に疑問を投げかけるのです。人間とはそんなものです。聖書にもヨブが率直に信頼の心で神に不平を述べる場面があります。神の摂理が神の子らの愚痴の中にさえ示されることを、神の言葉は指摘しています。苦しみの中でヨブは言います。「ああ、彼に至る道が私に分かり、彼の住居に至れたなら！ 私はその御前で訴え、この口で盛んに弁論するだろう。」(ヨブ23・3~4) 哲学者の考察や、偉大な宗教の教えの中、あるいは市井の男女の些細な考えの中に、人間の歴史全体を通してこの世における神のみわざをなんとか理解したいというより、その正当性を示したいと考えていることが読み取れます。

その点について多様な考えがありますが、完全無欠な答えもなければ、全てを認めることも出来ません。昔から気紛れな運命や宿命に答えを求めた人々はいました。神を肯定しながらも、人間の自由意志を危険に晒した人々のことです。また現代は、人間と人間の自由を認めれば神を否認することになると考える人がいます。これらは極端で一方的な考えですが、少なくとも私たちが〈神の摂理〉という時、人生に関わる大きくて深い問題が前面に出てくることを示しています。どのようにして神の全能と私たちの自由とを調和させるのか。私たちの将来はどうなるのか。この世の数々の悪、つまり罪という道徳的な悪や

罪無き人々の苦しみに直面した時、神の無限の知恵と善とをどのように解釈し、理解するのか。幾多の出来事、恐ろしい異変の数々、また、偉大な、崇高な、神聖な行為の数々を何世紀にも渡って繰り返すこの私たちの歴史…これらはみなどういう意味をもっているのだろうか。全生命を永遠に葬り去るような最後の大変動がないのなら、それは決して到着点を見出すことなく、全てのものが出発点へと永遠かつ宿命的に戻ってくるという意味なのだろうか。あるいは反対に—ここで心は他のどんな理屈が与える理由より遥かに優れた幾つもの理由があるのだと感じている—全てを知っている確実な存在、私たちが神と呼ぶ御方が在すという意味ではないだろうか。神はその知性と柔和と賢明とで私たちに包み、創造主がみわざを完成させ休息なさった「第七日目」を目指して「強く優しく」私たちの存在（現実、世界、歴史、もし同意するなら私たちの反抗的な意志さえ）を導いてくださるのではないだろうか。希望と絶望との狭間にあつて危機に瀕している現在、私たちの希望の根拠を神の言葉が揺るぎないものとしてくださいます。信じられないほど素晴らしい神の言葉、何度聞いてもなお新しい神の言葉なのです。言葉とは人間がこの上もなく大きな要求を突き付けた時に一層の偉大さと魅力を帯びるものです。神はエンマヌエル、私たちと共にいます神なのです。（イザヤ7・4）そして、死者の中から復活して私たちの兄弟であるイエズスのうちに神が「私たちのうちに住まわれた」ことを示されます。（ヨハネ1・14）教会はいつもキリストという模範と聖霊の力によって導かれ、神の現存のしるしを絶え間なく熱心に捜し求め、調べ、提示し続けてきたといえるでしょう。それゆえ教会は、恩寵と神の摂理の意味するところを世界に宣言し示さなければならないのです。摂理は人間を愛するがゆえに、不可解な事物の重圧に押しつぶされそうな人間を救い、偉大で計り知れない愛の秘義に委ねることが出来るのです。そこでキリスト教は素朴な言葉でこれを表します。今日に至るまでキリスト教信仰と文化の遺産を担う言葉です。「神は見給う」「神は欲し給う」「神の御前に生きること」「聖旨の行われんことを」「神は曲線でも、真直ぐにお描きになる」…要するに神の摂理です。

教会が神の摂理を告げるのは、神が自ら摂理の神として御自身をお示しになったからです。それは神の創造と救いのみわざは分けることが出来ないほど一体化しており、両方が共に永遠の昔から定められていた唯一の計画を構成している、と啓示なさった時のことでした。聖書全体が神の摂理に関する最高の文書となったのです。聖書によると創造という形で神は自然に介入し、さらに素晴らしいことには、贖いのみわざを通して、私たちがキリストにおける神の愛によって更新された世界に住む新しい被造物となることが出来るようにしていただきました。事実、聖書は創造に関する章や、救いのみわざを記す数々の章で神の摂理について語っています。つまり、創世の書や預言書の中でも特にイザヤの書、詩篇、また歴史の中で働く不思議な神の計画（エフェゾ人、コロサイ人への書簡参照）についてのパウロの深遠な黙想の中、この世に現れた神のしるしを鋭く見つけだそうとする黙示録など。結局明らかになるのは、キリスト教のいう神の摂理が決して宗教哲学の単なる一章ではないということ、信仰とはヨブやヨブのような多くの人々の重大な問題の数々に答えを与えてくれるものだということです。神学的に堅固で確かな事柄に基づいて理性そのもの、理性の教訓を認めつつ十分に広い視野から答えを与えています。

この点について、私たちは聖伝に基づく信仰に関する考察へと導かれます。その過程においては、永遠の真理の範囲内で摂理について常に、また新しい角度から問い続ける人間のよき伴侶たらしとする教会の助けを借りることが出来るでしょう。第一、第二バチカン両公会議はそれぞれに貴重な聖霊の声です。それを黙想し、その深遠さに畏れをなすことなく、そこから生命の泉とも言うべき朽ちることのない永遠の真理を汲み取らねばなりません。

真剣な問いに対しては真面目で十分理にかなった答えが与えられるべきです。そこで私たちも一つのテーマの様々な面に触れようと思います。特に神の摂理がどのようにして創造という大事業を動かすのか、また多様で現実性にあふれた神のみわざを如実に示す表現について考えたいと思います。こうして摂理は卓越した知恵として人間を愛し、神の愛情がこもった配慮の第一の受け入れ手として、神の知恵を備えた協力者として神の計画に加わるよう呼んでおられることが明らかになります。対立ではなく愛の交わりをなしています。啓示、とりわけキリストにおいて、私たちの将来の運命という深遠な問題にも摂理の光が与えられています。それは秘義を損なうことなく御父の意向を保証してくれるものです。このように見てくると神の摂理は、悪と苦しみが存在する理由から否定されるのではなく、却って私たちの希望の砦となり、悪からさえも善を引き出せることを教えてくれるものです。第二バチカン公会議が明らかにした事実、世界の発展と進歩に対する神の摂理の大いなる役割を思い起しましょう。また、広がりつつある王国という素晴らしい構想のもとで、全知の神のこの世における絶え間ない賢明な行為の目的に目を向けましょう。「知恵のある者よ、この言葉を悟れ。賢い者よこれを理解せよ。主の道は直く、正しい者がそれを歩み、罪人はそれにつまづく。」（ホゼア14・10）

摂理と創造のみわざについて

創造によって神は無から全てのものを生じさせ、万物は神の外に存在しました。しかし、創造のみわざはそこで終わったものではありません。無から生じたものは創造主によって存在を保たれないかぎり、無に帰してしまいます。事実、宇宙を造られた神は、宇宙の存在を維持することによって今も創造のみわざを続けておられます。存在を保たせるとは創造し続けることなのです。

一般的な言い方をすれば、神の摂理とは何よりも〈保つ〉こと、無から生じた全てのものを支え維持すること、と解することが出来ます。その意味で、摂理とは誠に豊かで多様な創造のみわざを絶え間なく永続的に確認することであると言えます。創造された世界の中に創造主なる神が常に変らず現存しておられるということなのです。それは創造を絶え間なく続け、存在する全てのものの根源にまで及び、被造物の存在と行動の第一因として働く現存です。この神の現存には、創造しかつ創造したもの全てを保とうという神の永遠の意志が不断に示されています。それは至高の意志であり、この意志によって、神のみ固有な善なる本性を通して、神は絶えず無に対して存在を、死に対して生を、「闇」に対して「光」を、良し、と宣言しておられます。（ヨハネ1・4～5参照）一言で言えば、神の意志は万物の真・善・美を愛で給うのです。摂理の秘義には創世の書に記された「こ

れをながめてよしと思われた」神の判断が途切れることなく不変に続いているのです。これこそ創造のみわざを根本的に揺るぎなく肯定する判断です。（創世1・25、31）

この肯定は、いかなる悪にも左右されることはありません。たとえそれが宇宙に属する全てのものに内在する限界から生じた悪であっても、人間の歴史において起こったように「神はこれをながめて…よしとして満足された」に比して甚だ悲しい対象を持って生れた罪であろうとも同じことです。神の摂理は次の事実を認めよと勧めます。つまり、神の永遠の計画、その創造の意図の中には本来悪の入るべき余地はなかったが、一度人間が悪を犯した後は神が悪の存在を許されたこと、ただし「神がすべてをその善に役立たせ給う」（ローマ8・28参照）との言葉どおり、悪も結局は善に屈伏するということなのです。

神の摂理に関する真理は啓示のどこにも見られることです。創造の真理の場合と同じく啓示全体に充満しているといえます。創造と共にこれこそ神が「何度もいろいろな方法で」「その昔預言者を通じて」「この終りの日々には、その子を通して」（ヘブライ1・1）人々に伝えようとなさった事柄の中で第一の基本的な言及点となっています。そこでこの真理を啓示が直接話しているところと、聖書が間接的に証言している箇所を両方を本文に即して読み返す必要があります。

創造に関する真理は教会の教え（通常の教導職）の中で始めから考えられていました。ただし創造についての真理として荘厳な教義憲章『デイ・フィリウス』の中で宣言されたのは第一バチカン公会議の時です。それによれば「神は自分が創ったすべてのものを摂理によって保ち、治める。『この世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてのものを巧みに司り』（知恵8・1参照）、また被造物の自由な行動も含めて、『神の前に隠れることができるものは何一つない』」のです。（『カトリック教会文書資料集』 DS 3003）

公会議の文書は簡潔な表現ですが、その時代（19世紀）特有の必要性から記されたことは明らかです。公会議は何よりもまず、摂理についての教会の変らぬ教え、ならびに聖書全体の使命につながる不変の教理伝承を確認することを望みました。キリスト教信仰の不変の教えを確認することで、当時の唯物論や理神論などの誤謬に対抗しようとしたのです。周知のように、唯物論は神を否定し、理神論は神の存在と世界の創造は認めるものの、造られた世界に神は全く関与しないと主張します。従って、理神論は神の摂理に関する真理に直接攻撃を加えるものと断言してさしつかえないでしょう。

理神論に見られる創造のみわざと神の摂理との分離、唯物論固有の神そのものの否定は、唯物主義的決定論への道を開き、今ではこの説が人類と人類の歴史を完全に席卷しています。理論的唯物主義が歴史的唯物主義に変わったのです。こうした状況の中で神の存在、とりわけ神の摂理についての真理は、宇宙における人間と人間の自由に対して根本的かつ決定的な保証となっています。すでに旧約聖書では、神は不滅の強力な支えであることを示しています。「主よ、力よ、私はあなたを愛する。私の岩、砦、私の逃げ場。私の神、大岩、私はそこに身を避ける。私の盾、救いの角、私の城。」（詩篇17・3）神は人間が全存在をかけて寄り掛かれる揺るぎない土台です。「私のなりゆきはあなたの御手にある。」（詩篇15・5）

神の側から見れば、摂理は創造のみわざ全体と、特に被造物の中に占める人間の優位と

に対する最高の肯定であり、この世における人間自身の主権を根本的に保証するもの、と言えます。だからといって自然の法則が内在し決定的な働きをするということを否定するのではなく、むしろ唯物主義的決定論を排斥します。唯物主義的決定論は、人間の全存在を〈必然性の領域〉に落としめ、事実上〈自由の領域〉を無きものにしてしまいますが、自由こそは創造主が人間に定められたことなのです。摂理によって神は〈自由の領域〉を守る究極の拠り所となっています。

神の摂理への信仰は、今なお人間という存在の基本的概念と、人生の意義とにしっかりと結びついていることは明らかです。人間は盲目の運命に流されているのではなく、創造主であり父である御方に依存しているという確信があれば、人間は今までとは本質的に異なる方法で自らの存在に目を向けることが出来るでしょう。使徒信経の冒頭に「われは信ず全能の父」という言葉で記された神の摂理への信仰のおかげで、人間は諸々の運命論的考えから解放されるのです。

変ることのない伝統的な教会の教え、特に第一バチカン公会議の教えに倣い、第二バチカン公会議も度々神の摂理について語っています。神は「全てのものに父親のような配慮を示し」、特に「人類のことを」心に留めてくださいます。（『現代世界憲章』24番、『啓示憲章』3番） 神の配慮の現れは他にもあります。「永遠にして客観的、普遍の神法を通して神は全世界と人類共同体の道を整え、指し示し、支配される。」（『信教の自由に関する宣言』3番） 「人が存在するのは神が愛によって人を造り、愛によってその存在を保たせ給うからである。率直にその愛を認め、自らを造り主に委ねない限り、人は真理に一致して完全に生きることは出来ない。」（『現代世界憲章』19番）

超越した叡知の愛

度々受ける問い、時には疑いに発展していくのですが、今日この世に神はおおいでになるのか、おられるとすればどのような方法で現存なさるのか、この問いに対してキリスト教信仰は、明快で決然たる確信をもって答えます。「神は造られた全てのものに心を配り、摂理をもって治められる」と。この簡潔な表現で第一バチカン公会議は啓示された神の摂理についての教えを述べています。啓示によれば、聖書全体に沢山の表現が見えますが、神の摂理という概念には二つの要素があります。一つは〈配慮〉、もう一つは〈権威〉〈統治〉です。この二つの要素は互いに浸透しています。創造主である神は、地上の王の統治権力との類推から、全被造物を越えた至高の権威を有すると言います。全ての被造物は造られたという事実によって創造主である神に属し、神に依存する存在なのです。ある意味では、どんな被造物も〈自分自身〉よりも〈神〉に属しているわけです。被造物は何よりもまず〈神のもの〉であり、〈自分のもの〉となるのはその後です。どんな地上の権威と従属からも想像がつかないような、根本的で完全な従属関係になるのです。

創造主の権威（統治）は父としての配慮として示されます。この類比には、ある意味で神の摂理の核心に触れる真理が表れています。同じ真理を聖書は喩えて述べています。「主は私の牧者、私には乏しいものがない。」（詩篇22・1） なんと豊かなイメージでしょう。昔の信仰告白や初期キリスト教の伝承が摂理の真理のことを、ギリシャ語の〈パン

ト・クラトール)に相当する〈全能者〉という言葉で言い表わしたとしても 聖書にある〈牧者〉ほど啓示された真理の深さと美しさを生き生きと伝えることは出来なかったのです。〈全能者〉では〈牧者〉の深さと美しさを十分に伝えているとは言えません。実に神の摂理とは〈心遣いに満ちた権威〉であり、知恵と愛による永遠の計画を通して造られた世界、とりわけ〈人間世界のこと〉を治められます。〈配慮あふれる権威〉であり、力と共に優しさに満ちた摂理です。第一バチカン公会議が引用する知恵の書によれば、「この世の果てから果てまでその力を及ぼし全てを巧みにつかさどる」(知恵8・1)、造られたもの全てを抱き、支え、配慮し、いわば育み養うと聖書の別のたとえは語ります。

ヨブの書はこのように言っています。「見よ、神の威力はこの上ないものだ。神のように教えるものがどこにあらうか。…水のしずくを海から引き出し、その蒸気を雨に変えるのは神だ。雲がその雨を降らせ、それによって神は民を養い豊かに食物を与えたもう。」(ヨブ36・22、27～28・31)

「神は雲に雹を積み上げ、暗い雲から稲妻を放つ、神が雲をまわしたまえば、雲は定めのおりに回る。地上の世の面で、それらはすべて神の命に従う。」(同37・11～12)

シラの本も、「主は命じて雪を降らせ、稲妻を投げるようにと定められ」た。(シラ43・13) 詩篇も、神の「恐るべきみわざの力」「大いなる慈愛」「その威光と栄光の輝き」を称えて「主はすべてを慈しみ、そのあわれみはすべてのみわざの上にある」と歌い、宣言します。「すべての目が主に希望をかけ、時がくれば主はそのすべてに糧を与え、御手を開いて、生きる者に望むがままに、人を飽かせたもう。」(詩篇44・5～7、9、15～16)

「あなたは獣のために草を生えさせ 人に役立つ獣に餌を与え、こうして人は地から麦を、人の心を喜ばすぶどう酒を、顔を光らせる油を、人の心を強めるパンを受ける。」(同03・14～15)

聖書はいくつもの章句を費やして世界に及ぶ至高の権威としての神の摂理を讃め称えます。あらゆる被造物、中でも人間に対して特別の配慮を示すため、神の摂理は造られたものの効果的な力を利用なさいます。人間に備わる思慮分別という事実との類比を用いて言えば、そこに創造主の限りない先見の明に富んだ叡知が表れています。実際、造られたものを無限に越える御方である神は、大宇宙の中にも小宇宙の中にも存在するこの世の素晴らしい秩序を支える御方でもあるのです。万物を越えた創造主の叡知であるこの摂理こそは、世界が〈カオス—混沌〉ではなく 〈コスモス—秩序ある宇宙〉であることを保証してくれるのです。

「あなたは、数と目方で、全てのものを調べられた。」(知恵11・20)

聖書の表現では、事物の統治を直接神に帰していますが、第一因としての創造主である神の行動と、第二因としての被造物の行動とをはっきり区別しています。ここで私たちは現代人の心を占める問題に直面します。被造物の自主性はどうなるのか、この世における能動因の役割は何なのか、という問題です。

カトリックの信仰によれば、創造主の卓越した叡知こそが、神は摂理としてこの世におられること、また造られた世界は、第二バチカン公会議でいう〈自律性〉をもつ、という事実を保証しています。しかし一方では万物の存在を保ち、そのものたらしめるのは神で

あることも事実です。つまり「造られたもの本来の性質によって、物質的存在はそれぞれに固有の秩序と法則を与えられている。」（『現代世界憲章』36番）

他方、神の支配の仕方として、被造物は実際に真の自律性を持っており、これは「創造主の意向と一致した」（同）事柄です。

神の摂理は、まさにこのような〈造られたものが有する自律性〉の内に示されます。そこには神に固有な力と〈優しさ〉がはっきりと見て取れます。この自律性の内に全てを包む超越的な叡知、私たちには計り知れない知恵としての創造主の摂理が確認されます。あらゆるものに創造主の力と万物を統べる力が顕現しています。それでも知恵の書の〈優しさ〉が指摘するように、第二因としての被造物の役割は損なわれることなく、世の形成と発展のダイナミズムの内に存在します。

従って、世界の内的形勢に関しては、神の似姿として造られた人間は当初から本質的に大変重要な地位を占めています。創世の書によれば、人間は「つかさどり地を支配する」ために造られたのです。（創世1・28参照） 理性を備えた自由なものとして、しかしあくまでも被造物の一員として人間は、この世を統治する創造主のみわざにあずかり、聖トマスの美しい表現を借りれば、ある意味で「自らの摂理（配慮）」になるのです。またそれゆえに、最初から人間には神と被造物、特に他の人々に対する特別な責任が課せられています。

こうした旧約時代の伝統に則った神の摂理についての考え方は、新約によって確認され、より豊かなものとなりました。摂理に関するイエズスの言葉のうちでも最も感動的なのは福音史家マテオとルカの記した次の教えです。「何を食べ、何をのみ、何を着ようかと心配するな。それらはみな異邦人が切に望むことである。天の父はあなたたちにそれらがみな必要なことを知っておられる。だからまず神の国とその正義を求めよ。そうすればそれらのものも加えて与えられる。」（マテオ6・31～33、ルカ12・29～31参照）

「二羽のすずめは二アサリオンで売っているではないか。しかもその一羽さえ、天の父のゆるしがなければ地に落ちぬ。あなたたちは頭の髪の毛までもすべて数えられている。恐れることはない。あなたたちは多くのすずめよりも値打ちがある。」（マテオ10・29～31、ルカ21・28参照）

「空の鳥を見よ。まきも、刈りも、倉に納めもせぬに、天の父はそれを養われる。あなたたちは鳥よりもはるかに優れたものではないか。…なぜ衣服のために心を煩わすのか。野のゆりがどうして育つかを見よ。苦労もせず紡ぎもせぬ。私はいう、ソロモンの栄華の極みにおいてさえ、このゆりの一つほどの装いもなかった。今日は野にあり、明日はかまどに投げ入れられる草をさえ、神はこのように装わせられる。ましてあなたたちによくしてくださらぬわけがあるろうか。信仰うすい人々よ。」（マテオ6・26～30、ルカ12・24～28）

これらの教えによって主イエズスは、旧約聖書に含まれる神の摂理の教えを確認するだけでなく、人間、それも個々の人間の問題に深く立ち入り、神が父としてこの上ない細やかな心遣いをもって接してくださることを示しておられます。

いと高き御者は、人間の逃れ場、砦、力であるとたたえる詩篇の章句は本当に素晴らしいものです。たとえば詩篇90「いと高き者の守りのもとに住み、全能なる者のかげに宿る

ものは、主に言う、『あなたは私の逃れ場、私の砦、私の信頼する神。』あなたは、『主は私の逃れ場』と言って、いと高き者を自分の住居とした。…私に頼ったから私は彼を救おう。私の名を知っているから私は彼を高めよう。私にこい願えば彼に答えよう。彼の苦難の時、私はともにある。」（詩篇90・1～2、9、14～15）

非常に美しい表現です。けれどもイエズスの教えは、さらに深く完全な意味を明らかにしています。事実、それこそは御子の言葉、摂理について語られたことをすべて〈お見通し〉になり、御父の秘義の完璧な証人となられた御子の言葉なのです。すなわち、摂理と、父としての心遣いの秘義であり、野の草やすずめのような最も小さなものに至るまで、全ての被造物に愛を注がれる摂理の秘義なのです。ましてや、人間によくしてくださらないはずがあるでしょうか。これこそキリストが一番強調したかったことです。神の摂理が人間より劣った生き物にこんなにも寛大な心を示されるなら、人間に対してはいかばかり心を砕いてくださることでしょう。摂理について語る福音書のこの章には、創世の書の冒頭から見られる価値の段階に関する真理が示されています。創造の様子を述べた部分で、人間は全被造物の首位に立つことを明らかにしています。人間の本性にも精神的にもこの卓越性が備わっています。それは摂理の配慮のうちにも神の御心のなかにもある卓越性なのです。

さらにイエズスは、創造主からこのような特権を与えられた人間には、摂理によって受けた賜を用いて神に協力する義務があることを重ねて強調なさいます。このため人間は感動的・物質的な有限の価値のみで満足することは出来ません。人間は第一に「神の国とその正義」を探し求めるべきなのです。なぜなら「そうすれば、それらのもの（地上の物事）も加えて与えられる」のですから。（マテオ6・33参照）

キリストの言葉は、摂理の特別な次元に私たちの注意を促します。摂理の中心には理性と自由を備えた存在である人間がいるのです。

摂理と人間の自由

神の摂理の秘義を究めていくと、しばしば次のような疑問に襲われます。もし神が存在し、森羅万象をつかさどっているのなら、人間は自由であると言えるだろうか。そもそも人間の自由とは何だろうか。どんな使命が託されているのか。自由の濫用から生じた罪という悪の実を、摂理の光の下ではどのように理解すればよいのか。

もう一度、第一バチカン公会議の厳粛な宣言を聞きましょう。「神は自分が創ったすべてのものを摂理によって保ち、治める。『この世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてのものを巧みに司り』（知恵8・1）、また被造物の自由な行動も含めて、『神の前に隠れることができるものは何一つない。』（『カトリック教会文書資料集』 DS 3003）

摂理の秘義は、創造のみわぎ全体に深く刻み込まれています。神の永遠の知恵を表すものとして、摂理は創造に先んじています。神の永遠の力の表れとして、摂理の計画は創造のみわぎを支配し実行に移します。ある意味で、摂理は創造のみわぎの中に実現されると言えましょう。摂理は万物を超越しますが、同時にあらゆるものに内在しています。先に見た公会議文書によれば、このことは知性と自由意志を授けられた被造物の場合とり

わけよく当てはまります。

摂理は全被造物を「力強く、たくみに動かし」つつも、神の似姿として造られた被造物には特別な配慮を示します。彼らは創造主がお与えになった自由を通じて第二バチカン公会議の言う〈造られたものの自律性〉を享受しています。（『現代世界憲章』36番参照）

こうした被造物の中には、純粹に靈的な存在も含まれ、目に見えない世界を形づくっています。それについては後ほど触れることにしましょう。見える世界で神の摂理が特別な配慮を示す対象となるのは、人間です。第二バチカン公会議によれば、人間は「神がそのもの自体のために望まれた、地上で唯一ひとつの被造物」なのです。（同24番）従って、「人間が自己の真の姿を発見できるのは、真に自己を与えるときのみ」（同）です。

人間が造られたことで目に見える世界が完成したのだという事実は、私たちの前に神の摂理の秘義についての全く新しい展望を示しています。第一バチカン公会議の教義憲章が強調するように、知恵と知識そのものである神の目にはあらゆるものが「隠れもない（明らか）」—ある意味では赤裸々である—理性を備えた被造物、すなわち人間が、意識的かつ自由に選び、決定した行動であったとしても、被造物の自由意志に関わる領域においても、神の摂理は創造力に満ち、全てを統括する第一原因となる力を失いません。摂理は何ものにも勝る卓越した愛の知恵です。愛を通して力強く、優しく働きます。こうして自らの被造物を豊かに恵み、父親のような心遣いをもって養い、その自由意志を尊重しつつ導いていくのです。

神の永遠の創造の計画と人間の自由との接点に、不可思議ではあるが感嘆すべきひとつの秘義が、次第に明確な形をとって浮かび上がってきます。この秘義は、神の行動と人間自身の決断との間の密接な関係（第一に存在論的な、次に心理的な関係）の内に存在します。このような意志決定の自由が理性を備えた被造物の本性に属するものであることを、私たちは知っています。また人間が自由であるという事実が、傷つきやすく弱くても真実であることも、経験からわかっています。第一原因である神との関係については、トマス・アクィナスの意見を聞くのがよいでしょう。ここでは万物を本来の目的に向けて導く神の叡知の表れとして摂理が強調されています。「物事をその目的に沿って合理的に整えること。」（『神学大全』 I,q.22,a.1）神に造られたものはみなこの目的性を受けており、従って神の摂理の対象となるのです。（同 I,q.22,a.2参照）神の似姿として造られた人間にとっては、目に見える被造世界全体が神のもとへと近づいていき、被造物の最終目的を成就させるための道を見出します。この考えは、イレネウスも他の箇所でも述べています。（『異端論駁』 4,38,1105-1109）また、第二バチカン公会議の、世界の発展に寄与する人間の働きについての教えの中でも繰り返されています。（『現代世界憲章』7番参照）この世の真の発展—進歩—のために、人間は召されています。この世に神の国を打ち建てるためには、単なる〈技術〉だけでなく〈倫理的〉性格を備えることが必要です。（同35、43、57、62番）

神の似姿として造られた人間は、目に見える被造物の中でただ一つ、創造主が「それ自体のために望まれた」存在です。（同24番）超越的な神の知恵と力が支配するこの世にあって、神に全てを負いつつも、人間は自らのうちに目的をもつ存在でもあります。個人

として、人間は自分の運命を決定します（自己目的論）が、そのおかげで自己開発へと向うのです。同時に義務でもある賜で豊かに満たされ、人間は神の摂理に包まれます。シラの手紙は教えます。「主は土から人間をつくり…そして口、舌、目、耳、考えるための心を人間に与え、知識と分別を与え、善と悪を教え、人間の心にご自分の光を与え、そのみわざの威力を示された。」（シラ17・1、6～8）

このように〈生きていく〉ための手立てを授けられて、人はこの世の旅路に乗り出していくのだと言えましょう。人は自分自身の歴史を綴り始めるのです。神の摂理が、旅の間中ともにいてくださいます。再びシラの手紙を読みましょう。「神は人間の道を絶えず見られ、その御目の前には隠れるところがない。彼らの行ないはみな太陽のように神の御目の前にある、神の御目は、いつも彼らの道にとめられている。」（同17・15、19）

詩篇は、この真理に印象深い表現を与えています。「私が暁の翼を駆って、海の果てに住もうとも、御手は私に置かれ、御右手は私をとらえる。…あなたは私の魂を知りつくされる。私の骨はあなたに隠されていない。」（詩篇38・9～10、14～15）

こうして神の摂理は人間の歴史の中に、恩寵と自由の歴史の中に、心と意識の歴史の中に現存なさいます。人間の中に、人間と共に摂理の行動はリズムについていき、人間の本性の発展の法則に順応するという意味で〈歴史的〉な次元を得ます。ただし、自律する存在としての神の超越性にはいささかの変化もなく。摂理とは個人と社会の、つまり人間の歴史の中に神が永遠に現存することです。諸民族の歴史、全人類の歴史は、神の〈御目〉の下に、全能の神の下で展開します。造られたもの全ては摂理によって「世話され」「治められ」ていますが、理性を有する自由な存在—被造物の場合、父親のような配慮に満ちた神の権威はその自由を尊重します。自由とは神の存在そのもの、神の自由そのものの似姿であるからです。

被造物の自由を尊重する態度はまことに本質的なもので、摂理の神は人間が罪を犯すこと（天使の罪さえ）もお赦しになったほどです。理性を備えた被造物は全てのものの中では抜きん出たはいても、常に限られたものであり、不完全なものですが、自らの自由を悪用して創造主である神に反抗することが出来るのです。これは人間の心にとって苦悶のもととなる事実です。シラの手紙は非常に深みのある言葉でそのことを写しています。

「はじめ人間をお造りになったのは主である、主は人間をその意志のままにされた、あなたは望みさえすれば掟を守れる、主に忠実を守るのはあなたに可能なことだ。

主はあなたの前に、火と水とを置かれた、あなたは望み通りに手をのべよ。人間の前には生命と死とがある、望みのままにそのいずれかが与えられる。その知恵は偉大で、全能で、すべてを見通す。主の目は、主を畏れる人々の方に向けられていて、人間の望みをすべて知っている。

主は誰にも、悪人になれとは命じなかった、また 誰にも、罪を犯す許可を与えなかった。」（シラ15・14～20）

「自分の過ちに気づくものがあるか」と詩篇は尋ねます。（詩篇18・13参照）しかし、罪によって人間が神を拒んだという前代未聞の事実についても、摂理を考えることに光を得て、私たちが同じ罪を避けるための役に立ちます。

人間が理性のある自由な存在として造られたこの世では、「そもそもの始めから」罪を犯すことが可能であったばかりでなく、実際に罪が犯されました。罪は、神に対する根本的な対立です。罪とは、疑う余地なく絶対に神がお望みにならないことです。それにも拘わらず、神は自由な存在・人間を造ることによって、罪をお赦しになりました。罪は被造物に与えられた自由が悪用された結果です。以上の点、つまり啓示によって知る事柄、および罪の結果を体験できるという点から、次のことがわかります。神の超越的な知恵から見れば—造られた世界全体を展望する時—罪を犯す可能性を徹底的に締め出してこの世から自由を奪うよりは、自由の悪用という危険を冒しても、造られた世界に自由を与えることの方がより重要であったのです。

しかし、神は摂理によって、一方では罪の存在を許しながらも、他方では父の愛を込めた心遣いをもって、永遠から愛による償い、贖い、義化（聖化）の方法、救いの道を用意してくださったのです。事実、自由は愛へと秩序づけられています。自由でなければ愛することが出来ないのです。善と悪との戦い、罪と贖いとの戦いにおいて、勝利を得るのは愛なのです。

※ 訳出してないもの 「人間の運命」 「悪の存在と苦しみ」 「苦しみの意味」 「人間の歴史的条件と第二バチカン公会議」 「摂理と神の国の成長」